

地域史について

印 牧 邦 雄

最近、増田四郎氏の随筆「東と西」を読んで種々と示唆を受けた。私は以前より増田氏の著書や論文を読み、西欧中世の社会経済史に興味を覚えている。特にドイツ中世集落の研究法は、私の集落史研究にとつて裨益されることが多大である。

さて私はいわゆる郷土史と云う概念に対して従来から反撥を感じてきた。そこには何かしら偏狭で独善的なものが感じられてならないからである。名称も何か変で、自分のふるさとと田舎の歴史を研究するものゝようにとられる。郷土史の研究は何も自分のふるさとの研究に限ることもないし、更に田舎の歴史を研究すると云うことになる、何か官僚的歴史家の造語のような臭がしてくる。戦後は地方史と云う名称が盛んに使われているが、これもまた適切な名称とは云えず、むしろ増田氏が云われるように、地域史といった方が妥当ではな

いかと思う。

増田氏のものを読むと、戦後における西欧の歴史学者の間では地域史の問題が真剣に検討されているという。戦前ではいわゆる中央史的立場から地域史を見てきたのであるが、戦後は地域史を綿密に研究することによって自国の歴史を再検討しようとしている。ドイツにおける地域史研究は最近の史学界の主流だといわれる。ドイツの学界は地域史の総合的研究をめざし、そのなかから史実に最も合致した法則を見出そうとしている。しかも自分のふるさとと云つた特殊な地域ではなく、ごく普通の地域をしらみつぶしに調査してゆく。そして各地の大学が中心となつて、わが国でいえば県か郡ぐらいの地域を総合的に研究している。その規模は驚くべきものがあり、またわが国とは具体性の度合がまるで違つているという。イギリスでも各州別の徹底的な地域史研究が行なわれている。かのV・H・Cは各州の自然や歴史等の一切を一目のもとに明らかにしている。既に一〇〇巻を越えいまなお着実に刊行されているという。わが国の歴史学は西欧史学の方法概念を輸入して発達したものであり、地域史研究

印牧 地域史について

の成果に立つてなされたものではない。戦後地域史の研究が盛んになつた理由の一つは、戦前の歴史学に対する率直な反省なり批判が行なわれ、わが国の歴史を再検討しようとするところからである。本県も既に福井県史や敦賀郡誌等が刊行されてから半世紀に近い年月が経つており、その間、歴史学は著しく進歩し、新史料の発見もまた少なくない。最近各県で県史の編纂が行なわれ、史料の収集も活発に行なわれている。本県もこの辺で県全体の総合的地域調査を行ない、V・H・Cに劣らない県史或は郡史を新たに刊行してはどうかと思う。優秀な識見と豊富な経験をもつた歴史家を主任に迎え、それに参加することを誇りとする、優秀で、活動的な若干の専門家を委嘱したならば、必ずや優れた県史或は郡史が編纂されるであろう。スポーツ振興も大切に違いないが、この方面の文化事業も閑却しないであらう。

県立図書館は既に通巻五〇号に及ぶ「若越郷土研究」と刊行未刊行を含めた一〇集の「若越郷土叢書」を次々刊行してきている。特に後者は学界でも貴重な史料集として、夙にその名も高いことは周知の通りで

ある。最近では館内に郷土室を開設したり、また毎夏史料取扱講習会を開催すると云う熱の入れ方である。これは当局者の異常な熱意と努力によるもので深い感謝と敬意を表したいと思う。どうか図書館本来の目的を達成されると共に、今後更に優秀な刊行物の発行を続けられ、本県の地域史研究を増々発展させてほしいものである。

最後に当局者に希望したいことは福井県の綿密な総合地域調査による福井県史の編纂を具体化することを研究してほしいと云うことである。